不思議な作曲

「この子だよ。」

女将が利他を見上げ紡木の質問に答える。

「なるほど。八雲さんもお久しぶりですね。あの日以来かと。」

「そうだね。でも今日はあんたと昔話をしに来たんじゃないよ。」

「そうですか。」

女将と紡木という人物のやり取りを聞いていた番才は、目の前にいる白衣の男の底知れぬ何かを感じとった。この宿屋側の人間特有の何かを。

「では、札を貸していただけますか？」

紡木は利他に手を差し出す。ここに来る前に女将に言われ持ってきていた札を、利他は少し躊躇いながら渡した。

「ありがとうございます。早速作業を始めても？」

利他、女将の順に顔を窺った紡木は、二人の

反応を確かめてから白衣を翻し背を向け、寄って来た小さな女の子に「よろしくお願いします。」と利他の名前の彫られた札を渡した。

「すぐにご用意しますので、少しだけ待っていてください。」

腕まくりをしながら、紡木は女の子と一緒に奥の作業台へと歩いていった。残された番才と利他はそれを見届けた後で、洪水のように湧き出る質問を女将へと矢継ぎ早に浴びせる。

「ここは一体何なんですか？」

「あの方は一体？」

「おれの札は一体どうなるんだ？」

「一体一体うるさいねえ。そんなに心配しなくても、別にとって食われたりしないさ。」

女将は部屋の中央へと歩を進めながら、何から話せばと思案するように室内をぐるりと見回した。

「ここは『奏涯（そうがい）の間』といってね、あの紡木という男はこの部屋の長のようなもんだ。」

「奏涯の・・・間。」

「札のことを話すと長くなるねえ。」

「なんだよ。あの札ってただの札じゃないのか？」

不安になった利他の声が少し大きくなる。

「それを今から簡単に話そうとしてるんじゃないか。」

女将は応接用にも見える一角へ向かいながら、

「紡木！ここにお邪魔するよ。」と声をかける。

「どうぞ。」と返事が返ってきたのを確認して三人は腰を下ろした。

「懐葉の森に生える木の説明はしたね？」

一呼吸の間を置いて女将は話し出す。

「ええ。」

「あの木々は死者たちの記憶を宿す意志の器となって現れると言ったが、ほんの少しだけ違う。現れるのは記憶としての葉のことを言っていて、木そのものは最初から存在しているんだよ。」

「最初から？」

二人は揃って腕を組む。

「まだ生きている物の木もあるということ

さ。よーく見てみるといい。葉が生い茂った

木は死者の木。そうでない幹と枝だけの木は

“あんた達”、つまり未だ成長を続けている

物の木ということになる。」

番才と利他は顔を見合わせ、この不思議な空

間の理解をさらに深めた。

「そしてそれぞれが持っているその札は、

そのあんた達自身の木からできている。」

「私たちの木があるんですか！？」

番才は握り締める手汗で湿った札を見つめ、

利他は横から番才の札を凝視する。

「ああ、もちろんあんた達の木はある。利他

よ、番才の札を持ってみな。」

そう言われた番才は胸の内に不安がよぎるの

を感じたが、目の合った利他の瞳の奥に同じ

ような不安を見出し、変にかしこまりながら

自分の札を利他へ差し出した。

「・・・重い！？」

利他は札を持つや否や驚きを一言に集約して拡散した。

「重い？」

番才は利他の感想の意味がわからず問い返す。

「後で番才も利他の札を持たしてもらうといい。利他よ、その重さは番才の〝人生の重さ〟だよ。」

「番才さんの・・人生の重さ？」

「そう・・・。」

「その札は言わばその方の人生そのものとなります。そしてその札を原料に作り上げたこちらの紙に刻んでいただいた言葉を、読み取って音にするのがわたしの役目ということですね。」

女将の台詞を遮るように後ろから現れた紡木は、利他の札とそれと全く同じ色の紙を携え横に立った。

「まあ・・・そういうことだね。」

紡木を見上げた女将は、やれやれという表情でそう告げると「さて。」と席を立つ。

「鉛筆もできたのかい？」

「いえ。どうせなら目の前でお作りしてみせようかと思いまして。」

「そうかい。ならついでに説明もしてやっておくれ。」

女将は席を紡木に譲り自分が横に立った。

「ではいいですか〝利他さん〟」

「なんでおれの名前を！？」

唐突な不思議に利他は一気に警戒心を固める。

「おや？先ほどの八雲さんの話がまだよく理解できていないみたいですね。ではそれも踏まえて説明いたしましょう。」

紡木は番才のことも一瞥し話し出した。

「こちらの札はあなた方の木を削って作られています。故にあなた方の人生そのものだと言いました。ここではこの札を削り特殊な方法で一枚の紙におこし、そして・・・」

と言葉を一度切った紡木は、あの少女が走って持ってきた鉋（かんな）のような道具で利他の札を薄く削り、そこに芯を加え丸めて鉛

筆を作った。

「この鉛筆も、利他さんのこれまでを具現化した文具ということになります。これらを用いて紙に言葉を認めていただき、それを元にわたしがその言葉から音色を引き出させてもらいます。」

差し出された鉛筆と紙を手にした利他は、まじまじとそれらを眺め紡木へと視線を戻す。

「この言い方があまりしっくりこないようでしたら、〝作曲〟と言ってもいいですよ。まあ、あなた方が想像する作曲とは随分異なる方法にはなりますが、そういった捉え方でこちらは何も差し支えはありませんので。」

紡木の流暢な説明には確かな説得力が付随している。蝦蟇の壺の蛙たちがなぜ自分の付けたばかりの偽名を知り得たのかという疑問も解消できた番才は、利他の反応を女将や紡木と共に静かに待つことができた。

「わかりました。どんな方法であれ、償いのためにできることなら何でもやります。あ

の・・これ、期限とかありますか？」

「いいえ。いいですか利他さん。あなたがそれにどのような想いを綴るのかはあなた以外に誰も知りません。書きたいことを、想うことを、償いだと仰るのならその気持ちをそのまま表してください。それが同時に作曲になりますので。おそらくそれほど時間は掛からないと思いますよ。」

紡木の笑顔に深々と頭を下げた利他は、鉛筆を握る手に徐々に力が込められていくのを感じた。

「さあ、後は紡木の言っていたようにしてごらんよ。」

カウンターへと戻ってきた女将は、立ち尽くす利他へ向けて優しく言葉をかける。

「わかりました・・・あの・・・。」

「ん？なんだい？」

「先日は・・色々とすいませんでした。その、番才さんも・・・。」

頭を下げる利他に（わたしは頭を下げてもらえるような立場ではない）と心の中の喜びにそっと蓋をした番才は、反応に困り女将に助けを求める。

「いいさ。わたしは何も気にしちゃいないよ。だけどその気持ちがあんたにあるのなら、想ったことを包み隠さず書いておくれ。そうしてくれたらあの記憶はきっといい思い出に変わる。」

女将はそう言い終わると「楽しみにしてるよ」と奥の部屋に入っていった。ゆっくりと顔を上げた利他に「わたしも同じ気持ちです。ぜひ聴かせてください。」と告げ、番才も自室へと帰っていった。

「さてと名取や。悪いねえこんなことに付き合わせちまって。」

「何を言うんですか。こんなことむしろ楽しいくらいですって。」

「そう言ってもらえると本当に嬉しくなるね

え。じゃあ、行くよ。」

「はい。」

夜風も吹かぬ静寂の中、二人の姿は森の中に消えていった。

〜続く〜